

【解説】米・日のハイブリッド戦体制

2022-5-7 大村 哲

1. ハイブリッド戦の系譜

前稿で紹介したように、中国の喬良等が 1999 年に「超限戦」の考え方を確立し、ロシアはそれを学びハイブリッド戦争の体制を整備した。米国は、2005 年に「ハイブリッド戦争」という言葉を創り出した。2013 年にロシアの参謀長は「ゲラシモフドクトリン」を出した。2014 年のロシアによるクリミア併合を機に、西側ではロシアの戦法を「ハイブリッド戦争」と呼ぶようになった。

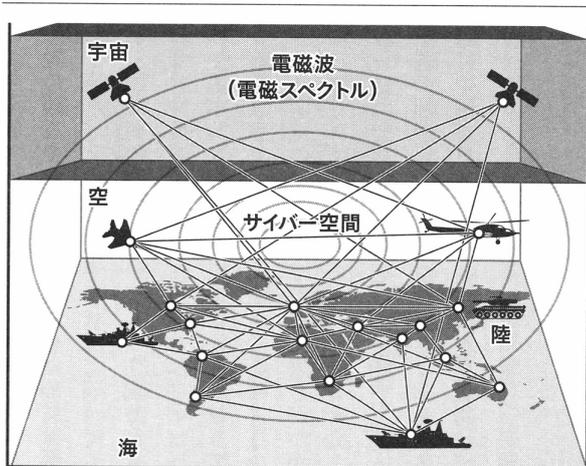
「ハイブリッド戦」の定義には、志田淳二郎のように狭く捉える考え方もあるが、ロシアの「ゲラシモフドクトリン」のように、核戦争までを含んだ、世論操作～サイバー戦～局地戦～大規模戦の全範囲をカバーするものとするのが一般的である。中国の「超限戦」の哲学は、韓非子(西洋で言えばマキャベリ)をベースにしている。

本稿では、米国のハイブリッド戦体制、日本のハイブリッド戦体制を紹介する。のために、渡部悦和・元陸自東部方面總監の文献[2]と、佐々木孝博・元海将補の文献[3]を主に利用した。自衛隊 0B の著書であるが、現役の人は発言しにくいので、0B が自衛隊の本音を代弁していると思われる。また、自国の手の内を明らかにしないのが普通であるので、日本についての情報は少ない。そのことをご理解の上、本稿をお読みください。

2. 米国のハイブリッド戦体制

米国のハイブリッド戦は、6 つの領域を想定している。文献[2]によると、陸、海、空、宇宙、電磁波、サイバー空間である(下図)。

図表1-2 六つのドメイン



出典: 米陸軍のFM3-38 Cyber Electromagnetic Activities

日本は、米国統合参謀本部が作成した「領域横断作戦 (COD : Cross Domain Operation)」を使用し、2018 年 12 月 18 日に閣議決定された「防衛計画の大綱」で、そのまま採用した。領域横断作戦で、

ドメインを6つに限る必要はなく、情報ドメイン、認知ドメイン、ヒューマンドメインを含める案もある。

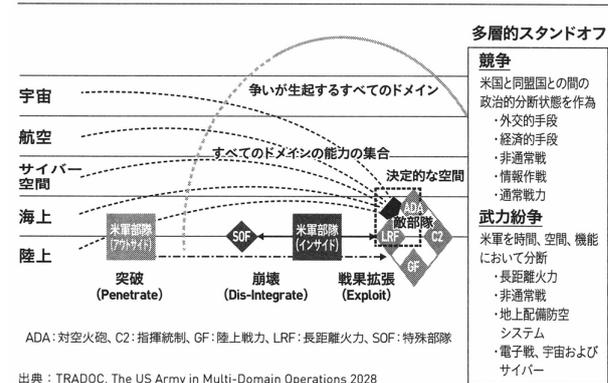
また、ハイブリッド戦は、「軍事」「軍事+非軍事」「非軍事」という戦いからなっている。(下図は文献[2])

図表1-3 様々な戦い (筆者の代替案)

軍事	軍事+非軍事	非軍事
核戦争	情報戦	金融戦
通常戦	宇宙戦	貿易戦
化学戦	サイバー戦 電磁波戦	外交戦
生物戦	ハイブリッド戦	資源戦
テロ・ゲリラ戦	制脳戦	法律戦
	アルゴリズム戦	制裁戦
	非対称戦	メディア戦
	技術戦	イデオロギー戦
	心理戦	

米軍の「マルチ・ドメイン・オペレーション」の将来の姿を表したのが下図である。(文献[2])

図表3-1 マルチドメイン作戦『集合』

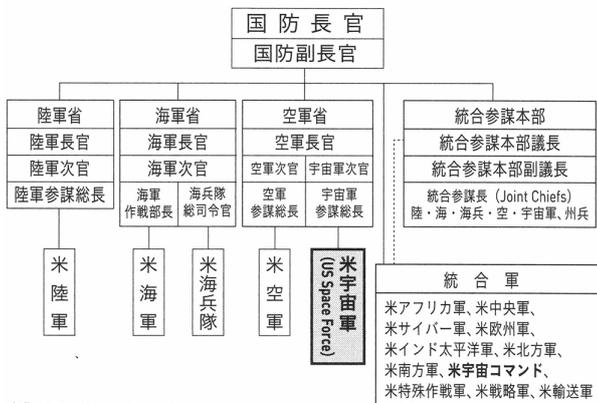


ここで「競争」と「武力紛争」という言葉が出てきた。米国が中東に軍事力を集中している間に、中国とロシアは、自国に近い地域で米国が部隊を結集させ、鋼線することを阻害する「接近防止/領域拒否 (A2/AD)」システムを構築した。米国はこれに対抗するために、国防省が、2010 年板『4 年ごとの国防計画見直し』で、A2/AD に対抗する方針を打ち出した。その後、紆余曲折を経て、「領域横断作戦 (Cross Domain Operation)」に到達した。この「領域横断作戦」は日本の自衛隊も採用している考え方である。そして、米海軍は 2015 年に「全領域アクセス (All Domain Access)」を宣言した。陸軍は「マルチドメイン作戦 (MOD: Multi Domain Operation)」と言うなど、各軍がバラバラに構想を発表しているのが米軍の特徴である。

従来の米軍の事態区分は「平和」と「戦争」だった。これでは、中露のハイブリッド戦に対抗できないので、マルチドメイン作戦では「競争」と「紛争」にした。「競争段階」では、「スタンドオフ (近づけない)」という言葉を使っている。これは

A2/AD に対抗したものだと考えられる。「紛争段階」では、「集合 (convergence)」という言葉を使っている。そして「紛争段階」を3つのフェーズに区分している。突破、崩壊、戦果拡張である(上図参照)。

図表3-3 「宇宙軍を含めた米軍の組織編成」



出典：United States Space Force

このような米軍のハイブリッド戦を実行する体制が上図である(文献[2])。米宇宙軍の創設を決めたのはトランプ前大統領である。上図の見方で注意すべきは、左側に描かれている米陸軍～米宇宙軍はフォース・プロバイダーで指揮下にある部隊を他の組織に派遣する組織である。右側の統合参謀本部と統合軍は、フォース・ユーザで、実際に部隊を使い作戦・戦闘を行う組織である。

米サイバー軍は、2010年に公式に活動を開始した。米サイバー軍の任務は、国防省の特定の情報ネットワークに対する日々の防衛・保護活動を指揮、軍事作戦にサイバー作戦上の観点から支援、国防省の特定の情報ネットワークに関連する作戦・防衛活動を指揮、国防省の特定の情報ネットワークに関連する作戦・防衛活動の際に、全般的な軍事的サイバー作戦を実施できるように必要な準備、となっている。なお、「米サイバー軍」の隷下には、陸軍サイバーコマンド、艦隊サイバーコマンド、第24空軍、海兵隊サイバーコマンドが属している。

米国防省が発表した「グローバルな防衛大勢の見直し(GDPR)」によると、米軍の海外基地は2001年以降、主要活動基地、前線施設、協力的安全保障拠点、に分類される。これら約60の国や地域に米軍基地をもっているが、小型のものは、存在を秘密にしているものも多いという(文献[4])。

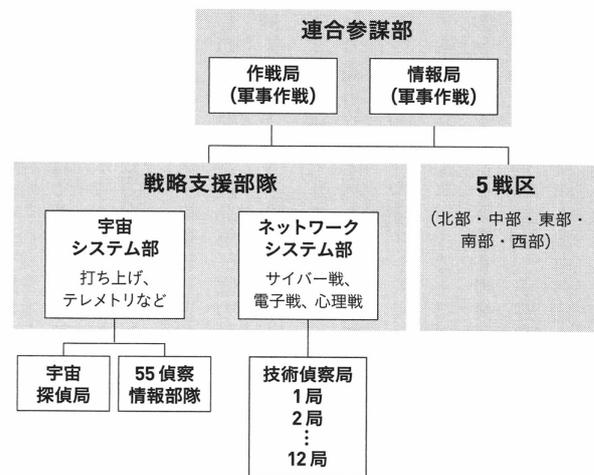
下図は、中国人民解放軍(PLA)の一部を強調した組織図である(資料[2])。「ネットワークシステム部(旧名称:旧参謀本部第3部)」の指揮下に、「サイバー部隊」または「サイバー空間作戦部隊」と呼ばれる部隊がある。これらの組織はサイバー戦、電子戦、そして潜在的には三戦(世論戦、心理戦、

法律戦)を含む任務を遂行する。「ネットワークシステム部」は、実戦を12の技術偵察局が担当し、サイバー・スパイ活動と信号情報活動(SIGINT)を担当している。

文献[1]には、米国の陸・海・空軍がバラバラに作戦行動をする弊害について書かれていて、それを解決したのが、ゴールドウォーターとニコルスという上院議員で、1986年「国防総省改組法」が議会で可決され統合作戦時における各軍種の統一指揮問題が立法の方式で一挙に解決したと紹介されている。こういう軍種ごとの権力闘争があることを大統領直属の統合参謀本部の指揮権という形での解決である。米軍は、所属軍種と統合軍というマトリックス組織で動くことになった。マトリックス組織という考え方は、米軍の専売特許ではなく、米IBMという民間企業でも採用されている。

また文献[1]には、米軍の兵器体系についての皮肉も書かれている。それは、戦闘機、爆撃機、空母、原子力潜水艦など、どれも開発費が莫大にかかり「同じ重さの金塊よりも高価」と揶揄されている。文献[2]には、米空軍がステルス方式の成功にこだわり、他の方式への努力を怠っているとの批判も書かれている。

図表2-6 PLAの軍事情報システム(移行中)



出典：China's Strategic Support Force: A Force for a New Era

3. 日本のハイブリッド戦体制

文献[2]の渡部悦和は、「日本の現代への取組は遅れている。特に米中に対してはすべての分野(情報戦、宇宙戦、サイバー戦、電磁波戦、AIの軍事利用)において、出遅れている」と見解を述べている。同氏は、日本出遅れの原因を以下のように挙げている。「憲法第9条(戦争放棄、戦力不保持、交戦権の否認)、これに起因する極めて抑制的な防衛政策(専守防衛、必要最小限の防衛力、軍事大国にならない、非核三原則)」が悪影響を及ぼしているところぼしている。

特に新たな領域(ドメイン)である宇宙戦、サイバー戦、電磁波戦においては、専守防衛を口実に、先手必勝が常識の世界で「攻撃的な戦い」がタブー視されているとしている。日本には「スパイ防止法」も存在しない。

日本では、2020年5月18日に、やっと20人規模の「宇宙作戦隊」が新しく編成された。

同氏は、また、「日本と中国は超限戦の観点で180度違う国家です。中国の超限戦では、任務達成のための手段に制約はない。人命や基本的人権への配慮、国際法などの法の順守、嘘をつかない、相手を騙さないなどの制約もない」とし、「一方、日本は民主主義国家、法治国家として、普遍的価値(自由、民主主義、基本的人権、法の支配、市場経済など)を大切にします」と対比させている。

防衛省と取引のある日本企業、例えば日本電気(NEC)、三菱電機、神戸製鋼所、パスコ(航空測量大手)へのサイバー攻撃・スパイ活動が2020年に次々と行われたことが報道された。このサイバー攻撃を行ったのは中国と推測されている。また、日本に対するサイバー戦では、中国・ロシア・北朝鮮だけでなく、同盟国や友好国も行っている可能性がある。

4. まとめ

ロシアの参謀長ゲラシモフのドクトリンでは、戦争努力の古典的軍事と非古典的軍事の比率は1:4としている。世界はそれぐらい戦争に対する考え方が変わっている。2014年にロシアによるクリミア併合がなされ、米国の軍事顧問がウクライナに入り、ウクライナ軍の教育・指導にあたった。ウクライナは、日常的にロシアからのサイバー攻撃、影響工作に晒されてきたので、この面に関してはウクライナ側が米国に教えることが多かったとされている。

ロシアによるウクライナ侵略戦争は長期化すると見通しが大勢である。2014年にクリミア併合で電撃的に行った軍事作戦、それと似た作戦をロシアは行いたかったようだが、今回2022年のウクライナ侵略戦争では通じなかった。日々の報道をどう解釈するかを含めて、我々が現代戦についての知識を更新し、思考を研ぎ澄ます必要があるだろう。付録に付けた参考文献の目次は、現代戦について何が議論されているかを知る手がかりになる。まずは目次を見ていただき、さらに理解を深めたい方は、参考文献を手にとってお読みいただければ幸いです。

1. 参考文献

- [1] 喬良『超限戦 21世紀の「新しい戦争」』(角川新書, 2020/1)
- [2] 渡部悦和『現代戦争論...超「超限戦」これが21世紀の戦いだ』(ワニブックス新書, 2020/7)
- [3] 佐々木孝博『近未来戦の核心サイバー戦 情報大国ロシアの全貌』(扶桑社, 2021/10)
- [4] 廣瀬陽子『未承認国家と覇権なき世界』(NHK ブックス, 2014/8)
- [5] 廣瀬陽子『ロシア 苦悩する大国、多極化する世界』(アスキー新書, 2011/8)

付2. 主要参考文献【目次】

喬良『超限戦 21世紀の「新しい戦争」』

日本語版への序文

序文

第 部 新戦争論

第1章 いつも先行するのは兵器革命

ハイテク戦争とは何か

兵器に合わせた戦争と、戦争に合わせた兵器開発

新概念の兵器と、兵器の新概念

兵器の「慈悲化」傾向

第2章 戦争の顔がぼやけてしまった

何のために、誰のために戦うのか

どこで戦うのか

誰が戦うのか

どんな手段、どんな方式で戦うのか

第3章 教典に背く教典

「露の如き」同盟

タイミングがよかった「改組法」

「空地一体戦」をさらに遠く超えて

地上戦の王者は誰だ

勝利の背後に隠されたもう一本の手

第4章 アメリカ人は象のどこを触ったのか

軍種の垣根の下で伸びた手

蕪沢病と死傷者ゼロ

グループ、遠征軍、一体化部隊

統合戦役から全次元作戦へ...徹底した悟りまであと一歩

第 部 新戦法論

第5章 戦争ギャンブルの新たな見方

戦雲の陰影を取り払う

ルールの破壊と失効した国境

戦争の大御所の作ったカクテル

足し算でゲームに勝つ方法

第6章 勝利の法則を見いだす...側面から剣を刺す

黄金分割の法則との暗合

勝利の語法...「偏正律」

主と全：偏正式組み合わせの要点

法則であって定式ではない

第7章 すべてはただ一つに帰する...超限の組み合わせ

超国家的組み合わせ

超領域的組み合わせ

超手段的組み合わせ

超段階的組み合わせ

第8章 必要な原則

全方向度

リアルタイム性

有限の目標

無限の手段

渡部悦和『現代戦争論...超「超限戦」』

はじめに

第1章 現代戦とは

1 『超限戦』の本質

超限戦の戦い

『超限戦』は日本人に対する警告の書

2 現代戦の特質

六つの作戦領域(ドメイン)からすべての作戦領域へ

ドメインと戦い(Warfare)

キネティック戦とノンキネティック戦

3 現代戦と最先端技術

現代戦において米国が重視する技術

中国はあらゆる手段を使い科学技術大国やAI 大国を目指す

大国間競争が中露のハイテク・パートナーシップを深化させている

4 情報戦(政治戦、影響工作、プロパガンダ戦など)とは

影響工作

プロパガンダ戦

・中国のプロパガンダ戦「大外宣」

・新型コロナウイルスをめぐるプロパガンダ戦

あらゆる手段を使い米国などの知的財産を窃取する中国

- ・米国の大学に数千人のスパイ：ボウトンがターゲット
- ・有名なハーバード大学教授が逮捕される

5 宇宙戦とは

民間の宇宙活動の活発化

安全保障における宇宙の重要性

宇宙ベースの主要な機能

- ・通信衛星
- ・情報・監視・偵察(ISR)
- ・ミサイル警報
- ・位置測定・航法・時刻配信(PNT)
- ・衛星指揮・統制構成(C2)
- ・宇宙発射

宇宙空間におけるリスクの深刻化

- ・宇宙ゴミ(スペースデブリ)
- ・宇宙状況把握とは

人工衛星軌道の種類

- ・サイバー空間の脅威
- ・指向性エネルギー兵器(DEW)
- ・キネティックエネルギーの脅威
- ・電子戦(EW)
- ・同一軌道上の脅威

宇宙に関する今後の見通し

6 サイバー戦とは

サイバー戦(Cyber Warfare)を定義する

サイバー空間で何が行われているか

- ・サイバー情報活動
- ・攻撃的サイバー戦
- ・政治的サイバー戦

日本にとってのサイバー戦脅威対象国

- ・中国
- ・北朝鮮
- ・ロシア
- ・日本の同盟国や友好国

世界の国々のサイバー能力など

7 電磁波戦(電子戦など)とは

電子戦

- ・電子攻撃
- ・電子防防護
- ・電子戦支援

中露の電子戦能力の向上

8 AI の軍事利用：アルゴリズム戦

AI について

- ・著名人の AI に関する評価
- ・AI とは
- ・機械学習と深層学習

「アルファ碁ゼロ」が AI 軍事利用の原点

AI の軍事への利用分野

AI 開発リスク抑制の原則

AI と完全自律型致死性兵器システム

AI に過度に依存するのは問題だが、助言役として有望

第2章 中国の現代戦

1 中国が考える現代戦

「超限戦」と中国の現代戦

- ・ 中国は覇権を握るために手段を選ばない
- ・ あらゆる領域で傍聴する戦略的辺境

中国の軍事戦略

- ・ 積極防御(アクティブ・ディフェンス)
- ・ 情報化条件下における局地戦争(信息化条件下局部戦争)

作戦ドクトリン

- ・ 一体化統合作戦
- ・ 接近阻止 / 領域拒否
- ・ 短期限定作戦
- ・ 非対称戦とハイブリッド戦

現代戦に不可欠な戦略支援部隊

- ・ 戦略支援部隊の特徴

2 情報戦

戦略支援部隊の戦略情報戦

- ・ 戦略情報作戦
- ・ 戦略支援部隊と三戦
- ・ 戦略情報支援
 - 技術情報の収集と管理の一元化
 - 戦区への戦略情報支援の提供
 - PLA の戦力投射の実現
 - 宇宙・核兵器分野における戦略防衛の支援
 - 統合運用を可能にする

3 宇宙戦

宇宙強国の夢

中国の宇宙開発の歴史と今後の予定

中国の宇宙開発体制全般

中国の宇宙開発で最も重要な組織は「PLA の戦略支援部隊」

戦略支援部隊の宇宙システム部と宇宙戦

中国の宇宙に関する野望：米国の見解

4 サイバー戦

国家ぐるみのサイバー戦

- ・ PLA が主導するサイバー戦
- ・ 積極防衛を超える中国のサイバー戦
- ・ 仮想私設網の統制強化

ネットワークシステム部とサイバー戦

- ・ ネットワークシステム部が担当するサイバー戦

サイバー戦の課題

- ・ PLA と国家安全部(MSS)との関係
- ・ 戦略支援部隊のサイバー戦と PLA や民間のネットワーク防護の関係

中国のサイバー戦は PLA 主導

- ・ サイバー戦の主力としての PLA のサイバー部隊
- ・ PLA 以外のサイバー戦組織
- ・ PLA のサイバー部隊の具体的なサイバー戦の手順

5 電磁波領域の戦い(電子戦など)

統合されるサイバー戦と電子戦 = 統合ネットワーク電子戦

ネットワーク電子戦を実施する部隊など

6 AI の軍事利用：アルゴリズム戦

中国の目標は「2030 年までに AI で世界をリードする」

中国の AI と半導体産業

- ・外国技術への依存からの脱却
- ・AI にとっての半導体産業の重要性

PLA は「軍民融合」による「AI 軍事革命」を目指す

- ・情報化から知能化によるアルゴリズム戦へ

AI の軍事への利用分野

- ・AI による軍事革命
- ・AI 軍事利用の問題点

ドローン・スウォームの可能性

- ・中国の世界最大のドローン・スウォームのデモンストレーション
- ・攻撃・防御でのドローンの活用

7 最新兵器

中国は多種多様なミサイルを保有する世界一のミサイル大国

- ・大陸間弾道弾「東風 41(DF-41)」
- ・極超音速弾道弾「東風 17(DF-17)」
- ・長距離巡行ミサイル「長剣 100(CJ-100)」
- ・潜水艦発射弾道ミサイル「巨波-2(JL-2)」

多様な攻撃型無人機を開発

- ・ステルス無人攻撃機「利剣(GJ-11)」

第3章 米国の現代戦

1 米国が考える現代戦

マルチドメイン作戦

- ・MDO の特徴
- ・「競争」段階
- ・「紛争」段階
- ・MDO に対する筆者の評価

前方展開前線基地作戦

米海兵隊の大胆な改革「2030 年の戦力設計」

- ・大胆な改革の核心
- ・米海兵隊の戦力設計の概要
- ・米海兵隊の 2030 年目標戦力
- ・米海兵隊改革への筆者の評価

技術安全保障

- ・5G の地勢学
- ・5G を巡るふたつのエコシステムが世界を分断する
- ・5G により米国と同盟国の間に不協和音が

2 情報戦

情報戦とは何か？

情報作戦とは

情報戦関連用語

情報の種類

サイバー空間での情報活動

3 宇宙戦

宇宙戦に消極的だった政府や議会

トランプ大統領の執念で実現した米宇宙軍の創設

- ・トランプ大統領の執念で実現した米宇宙軍の創設
- ・米宇宙軍と米宇宙コマンドは違う
- ・米宇宙軍は海兵隊以上、陸・海・空軍以下

トランプ大統領の宇宙政策はレーガン大統領の宇宙政策を参考にしている

米宇宙軍について

トランプ大統領の国家宇宙戦略

米国防省の文書「米宇宙軍(United States Space Force)」

米国の宇宙計画

4 サイバー戦

米国防省のサイバー戦略

米サイバー軍

米国家安全保障局等との連携

5 電磁波戦(電子戦など)

対テロ戦争等が電磁波戦に及ぼした影響

電磁波領域の戦いで攻勢に転換

- ・米国防省の対応
- ・米海軍の「電磁軌道戦」
- ・出遅れる空軍と陸軍

6 AI の軍事利用

米中の AI 覇権争い

将来の戦争は AI の影響を強く受ける

- ・将来戦は「人間の意志による戦い」からアルゴリズムの戦いに

米国防省における AI の軍事利用

- ・AI の軍事利用は進んでいる
- ・米国防省は「有人と無人のチーム」を重視する

米陸軍訓練教義コマンドの AI 研究事例

- ・迅速な意志決定ループ「OODA」への AI 利用
- ・市街戦における AI の活用

7 最新兵器

量子技術の軍事への応用

- ・量子レーダー
- ・量子通信ネットワーク
- ・量子センサー

無人航空機とレーザーによる弾道ミサイルの検知・破壊

第4章 ロシアの現代戦

1 ロシアが考える現代戦：ハイブリッド戦

ロシアの歴史的な安全保障観

ロシアの現代戦の根底にある「ハイブリッド戦」

国際間紛争の解決における非軍事手段の役割

あらゆる手段・戦い方を融合させたハイブリッド戦

ハイブリッド戦における核戦力の位置づけ

核戦力を巡るロシアの狙い

- ・INF 条約に対する米露の対応
- ・戦略核兵器削減条約に対するロシアの狙い

2 情報戦：中核となる影響工作

「フェイクニュース」に関連する用語の定義

影響工作の手法(第7の領域「認知領域」での戦い)

ウクライナ危機での具体的なロシアの行動

米大統領選での具体的なロシアの行動

ハイブリッド戦の制約・限界

3 宇宙戦：他領域の戦いを無力化

ロシアにおける宇宙の軍事利用

宇宙戦略を支える体制と能力

宇宙空間でのロシアの軍事的関与事例

4 サイバー戦：戦わずして勝つ戦い

ロシアのサイバー戦略とその狙い

- ・サイバー戦略に関する構文書体系
- ・情報空間における国家管理
- ・軍事的意義及びインテリジェンス的意義の強調
- ・情報空間における敵対行為の禁止

サイバー戦を具現化するための国家体制および組織

- ・国家安全保障会議を通じた統制・調整
- ・情報安全保障に関する省庁間委員会

ロシア軍における情報作戦部隊の創設

- ・情報作戦部隊(サイバー軍)の概要
- ・情報作戦部隊の任務・能力
- ・情報作戦部隊をロシア軍が保有する意味
- ・情報優越の確保が主任務の情報作戦部隊

5 電磁波領域の戦い(電子戦など)：他領域での戦いを支援

電磁波領域の戦いにおけるロシアの狙い

電磁波領域の戦いに関与したロシアの最新電子戦装備

- ・レペレントー(ドローン妨害システム)
- ・クラスーハ2(電波妨害システム)
- ・ヴィリーナ(AI 搭載電波妨害システム)
- ・ルール3(携帯通信妨害システム)

6 AI の軍事適用：ロシアの戦いを根本的に変革

ロシアにおける「AI 発展戦略」

- ・国家による主導
- ・米中の発展に対する焦り
- ・目標設定
- ・AI 開発の重点方針
- ・AI 発展のための優先的な科学技術
- ・2段階の達成期限

ロシアにおけるAIの軍事適用

- ・ロボティクスと自律システム
- ・無人ピークル
- ・迅速でインテリジェントな意志決定システム
- ・情報戦・影響工作でのAI適用システム

AIの軍事適用の狙い

7 最新兵器

極超音速滑空弾頭「アヴァンガルド」

大型ICBM「サルマート」

極超音速空対地ミサイル「キンジャール」

レーザー兵器「ペレスヴェート」

原子力魚雷「ポセイドン」

原子力巡航ミサイル「ブレヴェスニク」

第5章 現代戦の総括と日本の現代戦

1 現代戦の総括

日本は現代戦のすべての分野で米中に比べ出遅れている

- ・「超限戦」の中国と「専守防衛」の日本は真逆の国家
- ・日本には国際標準の発想が必要

ケース・スタディとしての武漢ウイルス騒動と超限戦

- ・中国当局の宣伝戦

- ・中国の権威主義モデルは台湾の民主主義モデルに敗北した

2 日本の現代戦

情報戦：武力紛争未満の事態に対処せよ

- ・米軍が採用した「競争」と「紛争」という区分
- ・中国、朝鮮半島、ロシアなどの情報戦にいかに対処するか

宇宙戦：全領域における戦いは宇宙に依存している

- ・40年間続いた「宇宙の利用 = 非軍事利用」というガラパゴス思考
- ・「防衛計画の大綱」に見る「宇宙の防衛目的利用」の変遷
- ・日本の宇宙戦の課題
- ・宇宙領域を担当する「航空宇宙自衛隊」構想

サイバー戦：日本は世界各国のサイバー戦のカモになっている

- ・サイバー戦でカモになっている日本
- ・安全保障を含むサイバー・セキュリティを所掌する官庁がない
- ・将来編成される「サイバー防衛部隊」には攻撃機能がある！？

電磁波戦：すべての領域の戦いは電磁波を使っている

- ・電磁波領域の管理の強化

AI の防衛適用・アルゴリズム戦

- ・軍事におけるすべての業務はAI を適用できる
- ・AI 開発のために人材及び予算を確保せよ

米中技術覇権争いに対して日本は国家ぐるみの態勢を確立すべき

- ・日本における機微技術管理を強化せよ

「超限戦」を超えて

おわりに... 『超限戦』の煌めきと闇